

み物あるべく候、其時は酒をうけて臺の下に置て、はさみ物をうけとりいたゞき、集養して御酒をたべ候、又等輩よりさゝれたる時は、中の盃を請てたべて、我左の盃をたべ候時はさみ物あるべく候、其時も盃の臺のそばに置て、はさみ物をいたゞき、たべて御酒をたべ候。

一五ツ梅の拵の事、自然はじめさせられ候へば、禮義いつものごとく、扱五ツの中の盃を取おろし、臺のそばに置て、さて我左の方のはしの盃を、その方の内の盃にかさねて酒をうけ、かさねながら酒をのみかけて、下の盃に入て、上の盃を又下にかさねて、皆酒をのみかさねながら、臺のはしにをきて、又右の方のはしの盃を取て、其方の内の盃にかさねて、酒をうけて是のみかけて、又下の盃に入て、上の盃をば下にかさねて、入たる酒を皆のみて、かさねながら臺の右の方のはしにをきて、先の中の盃をばのまにして、臺にすへて人にさし候時、兩方かさねたる盃を、左右の手にて取て、前のごとく五ツ梅の上にならべてをき候時、中の盃を頻に人よりたべよと申され候とも、しんしやく申候てさし候へば、其時人はさみ物にても、おさへ物にてもあれ、いだされ候時、取ていたゞき、くい候共、懷中候共、時宜によるべく候、又中の盃を取て、其時たべ候、しゐられ候へば、時宜よき程たべ候て、恐惶の人ならば、臺は酌取候人持て參られ候、其盃一つ我持參申す也、等輩ならば中の盃はのみて、いたゞきて臺に置て遣す也、

燶酒

〔饅頭屋本節用集加用〕カシ酒

〔倭訓栞前編六〕かん 酒をかんするといふは、温むるをいふ、かもするに同じ、或は間字を用るは、

白氏文集に、林間燶酒燒紅葉といへるに据にや、

〔塙囊抄二〕酒并茶ナドノアツキヌルキヲカント云、何ノ字ゾ、間字ヲ用、寒温間ヲ能程ニスルナルベシ、或ハ寒ヲ書、或ハ酣ヲ書ク、酣ヲバタケナハトヨム、盛ナル貌也、誠ニカンワロクシテ无興ナラバ、酣ナルベカラザル歟、然其茶并湯カンニハ通ジ難シ、仍間ノ字ヲ勝レタリトス、